

Letters Arpak

レターズアルバック

VOL.233

ISSN 2432-5295

ともに



C O N T E N T S

◆【ともに】…01～04

・むしとともに～ WITH INSECTS ～
・うまくつきあい、続ける
・移動のおともに小説を
・お馬さんと共に
・「ともに」認め合うための
行進
・50年に一度の機会をともに
・ランニングシューズと共に

◆今、こんな仕事をしています…05～08

◆新人紹介…09

◆近況&イベントのお知らせ…10

◆まちかど…裏表紙

・市民に守られてきた松本城と城下町

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band
 やつこトリプスのアルバムの中で With A
 Little Help From My Friends やつこ曲があ
 ります。このアルバムはロックショーの仕
 立てになっており、ポール・マッカートニー
 が歌うオープニングのサイケなタイトル曲
 の後に、リング・スターが少しとぼけた感
 じで歌い始めてホットするという演出（？）
 になっています。

小説家の片岡義男の翻訳では歌詞はこんな
感じです。

友だちにちよつと

手伝ってもらって

なんとかなる

友だちにちよつと

手伝ってもらって

IIのIになる

友だちにちよつと

手伝ってもらって

やってみよう

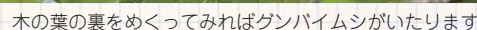
「王の王になる」の意味は少し微妙ですが（内田久美子訳では「心も軽くなる」となっています）、元気になれるような内容です。

今号のテーマは「ともに」。一人じゃないよ
という応援の気持ちを込めてお届けします。

レターズアルパック編集委員会

杉本健太郎：

建築プランニング・デザイングループ



木の葉の裏をめくってみればグンバイムシがいたります

今回のお題「とも
に」は、「WITH」の
意味ということであ
る社会に目を向け
れば、終わりが見
えないウィズコロ
ナ、多様な性を尊
重し共に生きる社
会、または、まち
づくりの視点から
協働、官民連携な
ど、いろいろ連想
してみました。私
らしく（大学の卒
論で昆虫や昆虫で
話を膨らませた
てみたいです）。

昆虫とは、理科の教科書にもあつたと思いますが、ざっくり言つてしまえば（例外はありますが）、体が頭部・胸部・腹部で構成され、胸部に6本の脚と翅を持った節足動物ですね。カブトムシやクワガタムシのように子供たちに人気のある虫もあれば、ゴキブリやハエのように嫌われたり、ハチのように怖がられたりする虫もあります。卒論は、ゲンバイムシ（軍配団扇に似ていることから）というカメムシの仲間を研究したので、今でも事務所内にカメムシが出現すると駆除要請が入ります（笑）。

さて、昆虫は、人類が誕生する前の遙か昔から地球上で脈々と営みが続けていますが、種数

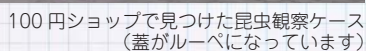
は、これまでに約100万種が知られており、全動植物の約54パーセントを占めるそうです。人類との関わりについても、カイコの繭から絹糸を生産したり、ミツバチの巣から蜂蜜を採取したりしてきました。昔からいなかの佃煮や蜂の子は食べられていましたし、最近では、昆虫食がブーム？として注目されている話題も耳にします。歴史に目を向ければ、古代エジプトでは、スカラベ（フンコロガシ）が太陽と結び付けられて崇拜され、装飾品等になつていましたし、日本では、トンボは後退せず、前にしか進まないことから、勝ち虫として、武士に好まれ、衣服や武具にトンボ柄が用いられてきました。

このように人類と深く関わり、ともに生きてきた昆虫ですが、現代は、虫嫌いの人が多いように思います。調べてみるとそんな私の疑問に答えてくれる研究がありました。興味のある方は、「なぜ現代人には虫嫌が多いのか?——進化心理学に基づいた新仮説の提案と検証——」をご参照ください(紙面の都合上、内容の紹介は割愛します)。

ここで、虫嫌が多い現代人に向けて、ウィズコロナならぬ、むしとともにある生活を提案し

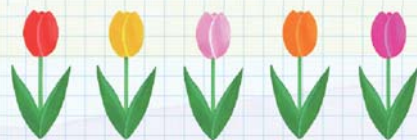
てみたいと思います。まずは、虫について、少しでも知ろうとすることです。例えば、虫全般に「気持ち悪い、カメムシ」「臭い」など、短絡的に捉える方が多いように思いますが、よく知れば、恐るるに足らずです。実際、あまり臭くないカメムシもありますし、とても綺麗なカメムシもあります。

次に、少しでも興味が湧いてきたら、アウトドアなどで自然に親しんでいるときに、虫を観察したり、調べてみることで。最近では100円ショップの虫グッズコーナーが結構充実していたり、スマホアプリを利用して写真を送れば、虫の名前が簡単にわかったりと、身近に感じやすくなっています。虫をきっかけに従来の価値観を転換し、自然の親しみ方の幅を広げたら、より豊かな生活が得られるのではないでしょう。



うまくつきあい、続ける

遠藤真森：
地域産業イノベーショングループ



新型コロナウイルスの流行下であることに変わりはありませんが、まちで開催されるイベントの類は徐々に解禁されているように感じます。感染の不安を完全に拭うことはできませんが、まちに活気が戻りつつあることは素直に喜びたいと思います。

出向中の豊岡市では、今年で30年目を迎える「たんとうチューリップまつり」が4月中旬から下旬にかけて開催されました。休耕田に咲き誇る約100万本のチューリップは圧巻です。

このイベントは、但東町でチューリップの球根生産をしていた農家さんが、国際競争による価格下落などによって生産をやめる前に、最後に1カ所に集めて咲かせ、甘酒で花見でもして解散しようというところから始まったそうです。しかし、やってみると一面に咲いたチューリップに地域住民が喜び、小さく何年か続けているうちに、地域外からも多くの観光客が来るようになり、規模も大きくなっていました。運営も、当初は農家主体でしたが、但東町の多くの方を巻き込んで行うようになり、誇りある地域の一大イベントとなりました。

感染症の流行の波は、これか



たんとうチューリップまつり

らも来ると思います。時には止まることも必要ですが、ずっと止まってもいられません。これまで続いていた地域のお祭りやイベントは、2〜3年中止してしまうと、再開が難しくなってしまうという話も聞きます。前号で書かせていただいた在来種の種採りもそうですが、規模を小さくしてでも続けることが大事なことあるんだろうと思います。続けられれば、新しい出会いがあったり、何か思いもよらない良いことが起きたりするかもしれない。無くなってしまうのは本当にもったいない。

ワクチンの副反応に苦しみながらの執筆になりましたが、感染症の流行とうまくつきあいがら、活動が続けていきましょう。

移動のおともに小説を

藤田始史：
ソーシャル・イノベティブデザイングループ



都市コンサルタントという仕事柄、さまざまな地域の仕事に関わります。そのため、必然と移動が多くなります。朝起きて、直接電車でどこかに行つて、事務所によって（あるいはそのま）また違う場所に行くといったことも多々あります。一日のほとんどが移動で終わってしまうことも珍しくありません。

移動時間が多い分、その時間をどう使うかが腕の見せ所というか、大切になってきます。人によって時間の使い方が違い、各々の個性が表れます。電車に乗るなりパソコンを開いて作業の続きをする人や、同行者と打合せ、雑談をする人、ゆっくりとしている人など。私自身は同行者といるときは話をして過ごしています。一人の時はこう見えて本を読んで過ごしていることが多いです（急な移動でも大丈夫なように、カバンに一冊は本が入っています）。今いる場所とは違う場所に行く。その頭の切り替えに、いったん本の世界に入るといって感じでしょうか。どんな本でも読みますが、出来るだけこれから行く場所に所縁のある本を選ぶようにしています。町田市であれば遠藤周

作、尾道市なら志賀直哉という感じで。

特にその地域に初めて行くときは、その地域が舞台になった推理小説を読むことも多いですが（浅見光彦シリーズとか）。事件がその地域の観光地や名所でおきてくれるので、移動している間に一通りの地域の情報が入ってきます。目的地に到着して、現地調査やまち歩きをしているときに「ここが事件のあった場所か」という感じで地域をみているので、他の人と違った視点になっている気がします。

ヨソモノとして地域に関わるのですが、その地域で採れたものの、作られたものを食べたり、そこに泊まったり、その地域に関わる時間を増やしながら、少しでもその地域の空気を感じる事ができればと思っています。

ポケットに名言を入れるように、移動のおともに小説を。



お馬さんと共に

三輪泰司：
名誉会長

皆さんは、何か動物と共にされていきますか？イヌ、ネコ、コトリ…。

本田・三輪家の馬場は、東堀川通、今のANAホテルの南にありました。間口3間半、奥行き20間、奥に休憩所と厩舎があり、馬が2頭いました。3歳くらいから裸馬の背に、ポイと乗せられていました。

澤田敏男先生とのご縁

4代目丹波屋茂助・本田重次郎伯父はカッコよい近衛騎兵。従兄の5代目茂さんは立命館次男の真三さんは同志社。で、京大馬術部へ。1951年5月24日、満20歳でした。厩舎は農学部グラウンドの西南。監督さんは農学部の澤田敏男助教授。まっとうしていませんが、1年先輩の今井禎一さんとはずっと永いお付き合いです。今井さんは、土木のご出身で、岡山県港湾部長をお勤めでした。市内の原尾島にお住まいで、県庁まで馬で通勤されていました。よく泊めて頂きました。水島港船員会館とかの整備に携わりました。澤田先生のご専門は農業土木。岡本道雄総長の学生部長の時、関西学研推進で、お世話になりました。第20代京都大学総長を勤められ、ご退任後「知新会」という会を作り隔月くらいで、「白馬アオの話」をしては飲んでいました。2017年10

月19日、亡くなりました。98歳。私は86歳。実に66年のご縁です。

東京でニューヨークで

ウマは可愛いです。背の感触、体温。人馬一如。人間さまより、馬の健康に気をつかうのです。私は26歳から6年、東京での「修行」の始まりは、世田谷玉川用賀町。さる病院の現場監理。近くに「馬事公苑」がありました。スウェーデンのLors Oluf Winsellさんとはオーランドでの国際会議後のバンケットで馬の話で意気投合し、帰途ニューヨーク、セントラルパーク近くのウエスタン馬術学校へ行ききました。1991年6月でした。

1995年6月には、JRA三木ホースランドパークが開園しました。内村雄二君の計画です。馬術は男女平等です。今、日本の乗馬クラブは270ほど。本田茂さんの次男・正博さんは、京都馬術連盟理事長。会長は裏千家の千玄室さんです。



京都府庁旧本館：マルシェで平安騎馬隊に来てもらった。こどもたちが大よろこび。

「ともに」認め合うための 行進

高瀬咲：
地域再生デザイングループ

京都と東京で行われたレインボープライド・パレードに参加しました。

プライド・パレードとは、性的少数者の権利、誇りを確かめ合い主張するパレードです。1969年6月28日にニューヨークで起こった「ストーンウォールの反乱」をきっかけに、差別・抑圧されている同性愛者の権利を訴える行進としてはじまり、性的少数者の権利を主張するものとして世界各地に波及しました。

日本でも1994年に初のパレードが東京で開かれて以降、全国様々な地方で開かれるようになり、京都では今年2回目の開催でした。好天すぎたこともあり、約5キロメートルのコースを歩くのは大変でしたが、長い道のりをともにすることで周囲の人と仲が深まりました。

東京レインボープライドは、代々木公園で行われる日本で一番大きなイベントで、コロナの影響でリアルでは3年ぶりの開催でした。パレードは事前予約制だったため、治道から参加しましたが、友人やブースの方との交流等、リアルで集まることの大切さを感じました。

2つのパレードに参加し、



シンボルであるレインボーフラッグ

パレードは「歩く人」だけでなく、「沿道」も一緒になって作るものだなと感じました。シンボルである6色の虹を掲げる、「ハッピープライド」と声をかける、また、ただ目が合って「互いに手を振りあう」ことだけでも、ともに存在を確かめ合う大切な行為だと考えます。

以前から「プライド・パレードの在り方」については様々な議論があり、色々と考えながらの参加だったのですが、多数派に「理解してもらおう」ことや権力をもった誰かに「認められるため」ではなく、それぞれのプライドを持って「ともに尊重しあう」ことが、パレードの根幹には必要だと強く思いました。

6月はプライド月間で、各地で多くのイベントが行われます。この記事をきっかけに、6色の虹をみかけた際は、ぜひ「ともに」の想いで心に向けてみてください。

50年に一度の機会をともに

羽田拓也：

都市再生マネジメントグループ

昨年度から門真市の庁舎エリア整備の検討をサポートしています。検討にあたっては、庁内の概ね入庁10年以内の若手メンバー10名によるプロジェクトチームが組織され議論を進めています。メンバーは、庁舎エリア整備の担当部署以外に、企画、こども政策、地域政策、建築指導、人事、教育、水道といった多岐にわたる部署から構成されています。

横断的な組織かつ若手で組織されるというかたちはなかなかないですが、昨年度は、新しい働き方や庁舎周辺での公民連携・市民協働等をテーマに意見交換を行ってきました。また、単に会議室での議論だけでなく、先進地事例視察や議論を刺



空間や時間を共有しての議論



メンバーによる先進地視察

激する環境に出向いての会議を通して、様々な空間や時間を共有しながら議論を進め、庁舎エリア整備ビジョンのメインコンセプトを取りまとめました。

今年度は、引き続きメンバーでの意見交換を通して、ビジョンのイメージを試行しつつ、庁舎エリアのあり方や庁舎エリアでの働き方・過ごし方を職員の皆さんだけでなく、市民の方々と共有しながら進めていく予定です。

市のメンバーと一緒に伺った視察先で聞いた「庁舎建替えは50年に一度の取り組みで、誰もやったことがない。新しいことにチャレンジする機会にできれば」という印象的な言葉や思いも共有しながら、庁内の若手の力を大いに発揮いただけるよう、我々もともに取り組んでいきたいと思っています。

ランニングシューズと共に

太田雅己：

生活デザイングループ

就職してから3年目になりますが、運動不足で体の衰えを感じてきました。

高校時代は剣道部、大学時代もホテルのバイトで館内を動き回るなど、なんだかんだ体を動かしていました。が、やはり就職してデスクワークが主になると運動不足気味で、体型にも目に見えて変化が出てきたことにショックを受けました。

できることから始めてみよう、朝のランニングをはじめました。形から入るタイプの自分には、まずランニングシューズを買ってみようと、靴屋へ……。店員さんに勧められて購入したシューズの機能性に感動しました。安定感があつて、地面をけり上げる反発力がすごい。これならしばらく続けられそうだと、モチベーションになっていきます。

ランニングを通して良かったことが3つあります。1つ目は早起きになること。休日でも早朝に走ることを目標にして、早起きして気持ちよく過ごすことができるようになりました。2つ目は汗をかいて体を動かすことで、頭も気分もすっきりすること。そして3つ目はまちを楽しむことができるということです。普段の生活圏より広い範囲を移動するので、景色やお店を見つ



大正区の港の風景



ランのお供

烏丸通にて夜間照明検討の第一歩が踏み出されました～烏丸通あかり LAB～

竹内和巳：
生活デザイングループ



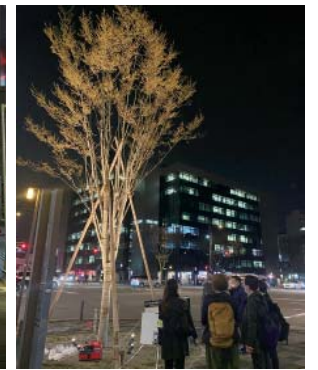
夷川～二条：中央分離帯の樹木への照明

年度末のある日、烏丸通の夜にちょっとした変化が起きていたこと、お気づきでしょうか？
3月25日（金）に、烏丸通まちづくり協議会により、実験的に夜間照明の設置による歩道の明るさや統一感の創出効果の検証を目的とした「烏丸通あかり LAB」が開催されました。
昨年度、協議会では、「夜間にも安心して歩ける環境づくり」に向けて、プロジェクトメンバーの活動を進めるなかで、夜間照明の意義を再認識し、今回の取組に至りました。
3つのエリアでそれぞれ異なる照明を設置したのですが、総じてイベント的でない「日常に馴染むほのかな灯り」が実現できたのではないかと思います。
一方で、実際に置いてみると、ここはもつとこうした方が、と

いうこともあり、やってみることで、メンバーが次のアクションを考えるきっかけになったのではないかと思います。
また、こういう取組をすると、やっぱり現場の活動ってみんなをひとつにするな、と感じます。ちまたで起こっている「とにかく社会実験」という風潮に色々思うこともあります（笑）、体を動かしてともにやり遂げる、ということはやっぱり偉大ななあ、としみじみと感じました。



蛸薬師～錦小路：行灯による歩道への照明 御池交差点：交差点の高木への照明



いばまちサミット～楽しい、住みたい、私のまちでもやってみたい～開催報告

水野巧基：
公共マネジメントグループ

茨木市では、地域活動の更なる活性化をめざして3つの事業に取り組みました。

①地域課題解決に取り組む地域組織の活動事例集「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」の作成、②地域活動の活性化に向けたワークショップの実施、③地域コミュニティに関するアンケート調査を昨年度に実施しました。

これらの事業は、地域組織の持続可能な運営に向けて取り組んでいるもので、今年度の成果を活動の担い手の方に向けて、学生や地域の方から報告を行い、情報を共有する「いばまちサミット」を3月19日に開催しました。当社は、報告会の開催及び①②の業務を支援しました。

①は、茨木市内に通う大学生が「イバマチ編集会議」に参加し、地域への取材を行い事例集の作成に取り組み、事例集について学生から報告を行いました。

②は、2つの校区で地域課題の洗い出し・共有を行い、その解決方策を検討するためのワークショップを実施し、その検討内容を報告しました。

来場者からは、「自分たちの地域でも同じような課題に悩んでおり、今回報告があった事例を参考に、取り組んでいきたい」「若い人が地域に関心を持ってくれて嬉しい。学生たち

と一緒にイベントに取り組みたい。」など前向きな声を頂戴しました。

茨木市は、地域活動が盛んで「ふるさとまつり」「運動会」「文化展」等を各小学校区で取り組んできました。近年は、自治会加入率の低下や活動の担い手の高齢化等の課題はありますが、昨年度の事業や報告会の実施によって「地域課題の共有、課題解決に向けたワークショップの実施と活動事例に係る情報発信」を行うことができました。

学生も事業に関わることで、地域の人たちも学生と連携して取り組んでいきたいといった機運も高まりました。事例集の作成やワークショップについては、今年度も取り組んでいくので、本事業から新たな活動へ展開していくといった動きにも期待したいです。



学生からの報告の様子

八王子駅周辺の未来の景観を考えるワークショップ

小島みのり：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ



ワークショップの様子

八王子駅北口周辺地区の景観づくりを考えるためのワークショップ支援を行い、ワークショップで得た意見から、八王子が今後目指したい未来の景観の姿を描きました。

ワークショップでは、地元の住民や事業者の方々のほか、市内外の3大学の学生さんにも参加してもらい、実際にまちあるきをしながらかまちの良い点を探してみたり、まちの将来像を描いたイメージスケッチに塗り絵をして手を動かしながら、より具体的な将来像を考えました。また、イメージスケッチの実現のために何ができるのかを行政職員の方々に考えてもらうウー



まちあるきで探したまちの良い点

クシヨップも行い、様々な視点から今後目指したい未来の景観の姿を検討しました。

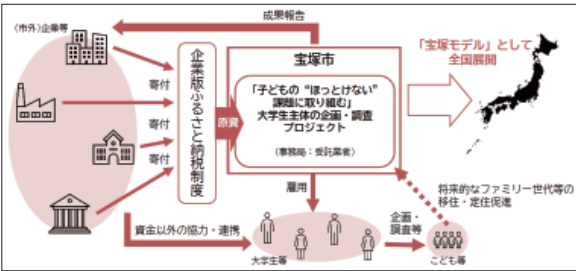
「景観」という言葉を聞くと、少し固いイメージや難しいイメージを持つ方も多いかもしれません。しかし、今回は、普段の過ごし方や活動の光景から、将来の景観を実際にスケッチに落とし込みながら、将来実現してみたいと思える空間を考えました。より幅広い年代や職業の方に「景観」を身近に感じてもらうやすい取組が出来たのではないかと思います。

今はまだお見せすることが出来ませんが、とりまとめた未来の景観の姿が皆さんの手元に届くことを楽しみにしています。

こどもの“ほっとけない”課題に取り組む大学生主体の企画・調査プロジェクトを実施しました

江藤慎介：

ソーシャルエンタープライズユニット (SEU)



企業版ふるさと納税制度を活用した新たな調査事業イメージ：筆者作成
① 企業版ふるさと納税制度を活用した調査事業が実現しました。
② 大学生が主体となり、企画・調査

宝塚市の委託を受けて、ファミリー世代（25～39歳）の転入促進等に向けて居住意向やその要因、強みや弱み等の基礎データの調査分析を行い、今後の課題、必要な施策を検討しました。

当業務は次の3つの手法により、これまでにない事業モデルとして本業務を実施しました。

① 企業版ふるさと納税制度を活用し、事業予算を確保しました

どの自治体も人口減少等による財政難が問題視される中、市民税や法人税等だけに頼らない多様な資金調達に取り組むことは喫緊の課題です。企業版ふるさと納税制度は、市外に立地する企業が実施する寄付額について、最大9割を軽減する仕組みです。宝塚市では当該制度を整備していたものの、令和3年度にこれまでおらず、令和3年度に

に取り組みました

コロナ禍により、大学生等の若者のアルバイトの場が失われたというニュースが連日報道されています。このため、本業務では大学生11名が春休みの期間を利用して参加（雇用）し、企画・調査を主体的に取り組みました。

③ SDGsの達成につながる調査課題を設定しました

本業務は企業版ふるさと納税制度を活用しているため、市民だけでなく寄附を行った企業にとっても「社会的に意義のある」業務とすることが重要です。このため、ファミリー世代の転入促進等にかかる社会的な課題として、関西圏に居住する共働き世帯は、こどもを孤立・孤独にさせてしまっている等の「こどもの『ほっとけない』課題」があるのではないかと、こうした課題解消に取り組む自治体にファミリー世代は転入したいのではないかと仮説を設定し、調査を実施しました。

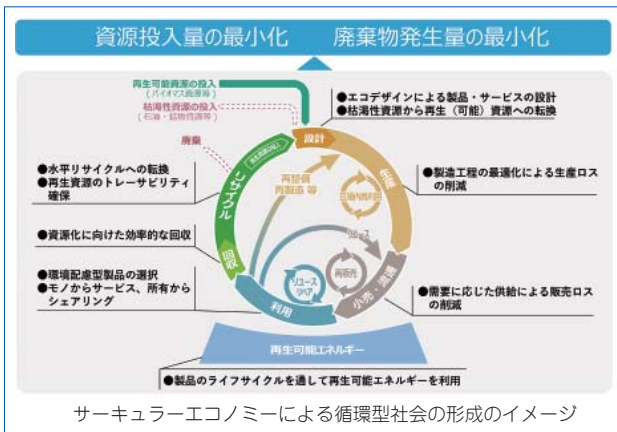
企業の社会貢献にも繋がる事業とすることで、新たな資金調達の可能性が広がり、また、コロナ禍において大学生等の若者が活躍する場の創出にも繋がりました。

※本事業は特命ユニット「ソーシャルエンタープライズユニット」（江藤、小川、豊福、羽田、畑中）が実施しました。今後は、本事業をモデルケースに新たな事業展開を模索していきます。

愛知県で全国初のサーキュラーエコノミーの推進を掲げたプランができました

齋藤友宣：

サスティナビリティマネジメントグループ



愛知県で県内産業のサーキュラーエコノミー*化を進め資源循環による持続可能な社会を目指すプランの策定を支援しました。

世界規模で資源・エネルギー需要が増加し、気候変動問題や生物多様性の損失、さらに新型コロナウイルス感染症の拡大など、大きな危機に直面しています。資源循環の分野でも、世界規模での天然資源の枯渇や、廃棄物の増加、プラスチックによる海洋汚染などが喫緊の課題となっています。

愛知県は、「あいちエコタウンプラン」(2004年)以降、リサイクル材などの未利用資源や未利用エネルギーの効率的な活用を図る事業への支援や、地域循環圏の実現につながるビジネスの支援(レターズ214号

に関連記事があります)などを20年近く行ってきました。

今回のプランは、これまでの取組を生かしながら、県内産業のサーキュラーエコノミーへの転換を推進することで、循環型社会の形成を目指し、さらに環境・経済・社会が統合的に向上する持続可能な社会を目指すものとして策定されました。これまでのプランは廃棄物・リサイクルが中心でしたが、今回のプランでは製造業などの動脈産業も巻き込み、設計・生産・流通・小売・利用・回収、リサイクルの各段階が資源投入量や廃棄物発生量の最小化を目指して取り組むことを県として進める点が特徴となっています。具体的には、県内産業のポテンシャルを生かした動脈産業と静脈産業が連携した6つの「サーキュラーエコノミー推進モデル」を設定している点です。

今後、これらの推進モデルを基に、県内企業を中心とした新たなビジネスモデルが構築、持続可能な社会に近づく動きが加速すると期待されます。

※この業務は、サスティナビリティマネジメントグループ、地域産業イノベーショングループの江藤が担当しました。

*3Rの取組に加え、資源投入量・消費量を抑えつつ、ストックを有効活用しながら、サービス化等を通じて付加価値を生み出すことを重視した経済活動。資源・製品の価値の最大化、資源消費と廃棄の最小化を目指す。

大阪市の生きた建築*の新たな展開に向けた取組を支援しています

太田雅己：

生活デザイングループ



まちあるきを通して見つけた建物の一例



まちあるきの様子

参加者が自ら「生きた建築」を見つけてワークショップを開催しました。

大阪市の「生きた建築」ミュージアム事業の一環として、市民がより身近に建築への興味・関心をもってもらうことを目的とするもので、港区の築港を対象エリアとしてまちあるきを行い、参加者が建物の魅力をレポートとしてまとめました。

事業の推進に係る有識者会議のメンバーである近畿大学の岡伸一先生と大阪公立大学の倉方俊輔先生を講師としてお招きし、まちあるきを通して建物の形や素材の特徴、時代背景など、建物を見る視点を解説していただきました。その後、参加者それぞれが見つけた建物を調査し、レポートにまとめた上で、

後日発表会とディスカッションを行いました。

ディスカッションを通して、それぞれの視点を共有しました。例えば住人目線では、愛着を持って住み続けている集合住宅について、長く住んでいるからこその建物の内部も含めた魅力などを語っていただきました。外の人目線では、住人目線だと見慣れて当たり前になっている建物だけど、特徴的な意匠で面白いというものもあり、改めて良さに気付くきっかけになっていました。

また、文化財のような価値づけがされていなくても、著名な建築家が建てたものでなくても、特徴的な意匠や、使われ方や歴史などに目を向けると、面白い建物がたくさん存在することがわかりました。

今回は参加者だけで意見交換をしましたが、今後、他の地域でも展開することや、発表するだけでなく、それを建物オーナーや周辺住民にも伝えることで、まちづくりや観光にもつながっていくような発展ができればいいなと思いました。

*「生きた建築」とは「大阪の歴史・文化・市民の暮らしぶり」といった都市の営みの証であり、様々な形で変化・発展しながら、今も生き生きとその魅力を物語る建築物等」という概念です。(大阪市HPより)

街のコモنزの再生

～大阪都心の賃貸集合住宅プロジェクトから見えてきたこと～

中塚 一：

「寺田町プレイス1」プロジェクトチーム



賃貸集合住宅 寺田町プレイス1 (撮影: 笹倉洋平)

大阪都心の下町である寺田町の賃貸集合住宅（寺田町プレイス1）プロジェクトでは、「15分生活圏の小さなコモنز」を再生し、人と街を繋ぐスペースをプレイスに変えていくプロセスを所内外の様々な専門家とコラボレーションしながらデザインしました。

私達は、経済成長と共に都市空間や建築を、経済性、合理性、管理のしやすさ、責任の明確化などから、官民の境界を明確に分離してきました。そしてその結果、私達の暮らしは豊かになったのでしょうか？

忘れ去られてきた「コモنز」を街に取り戻さないと、日々の暮らしが豊かにならないし、人と人との出会いからしか新しいアイデアや小さな営み、さらに創造都市や地域文化は生まれない事に私達は気づき始めたのだと思います。「人中心のまちづくり」って大上段に構えるのではなく、「15分生活圏に小さなコモ

ン」

を取り戻していく市民活動」の積み重ねが、人と街を繋ぐスペースをプレイスに変えていく原点だと考えました。

地権者の高齢化に伴う街の変化

戦後約80年を経て、大阪市戦災復興土地区画整理により換地された多くの約100坪の宅地は相続の時を迎えています。JR大阪環状線寺田町界隈は、住居系地域ですが、第2種住居地域で指定容積率が400パーセントという日本でも特殊な地区で日影規制が緩和されており、最近、民間事業者売却された敷地では、総合設計制度の活用により14階建てのマンションが乱立する景観が形成されつつあります。

今回のプロジェクトでは、住・働・遊が複合した都心生活地における「上質な普通の暮らし」はいかにあるべきか、街のコモンズとして賃貸マンションはどのような場を創造できるのかを、オーナー、設計者、施工者、居住者、店舗事業者、施設利用者などの関係者で熟議し、小さな実験を繰り返しながらデザインを実践していきました。

特に、寺田町プレイス1では、地域での生活者の視点で、地に足ついた「地域経済」「地域社会」「地域環境」をバランスさせた「持続可能な暮らし」はどうかあるべきかを議論し、プロトタイプとなる持続可能な地域づくりに寄与するデザインを生み出しています。

難波京の羅城門のレガシー継承

対象地は、古くは難波京の朱雀大

通に位置し、日本書記に記された羅城門があった都の玄関口という歴史的な物語を有していました。都の南の玄関口として、国内外からの若い人々を引きつけ、集い、住み、暮らす。そんな「街の登竜門」になればと企画が進みました。

プロジェクトを企画・設計・運営していく上で、以下の5つの基本方針を定めました。①持続可能な暮らし・建設費を抑えアフォーダブルな家賃でシンプルな暮らしを実現する。②高いエネルギー効率・風の道、壁面緑化、屋上ソーラーパネル（設置調査中）等による高いエネルギー効率を実現する。③グランドレベルでの賑わい・日常的な憩い、交流、生活サービスの提供による地域コミュニティの場づくりをめざす。④持続可能なモビリティ・車の駐車場を作らず、公共交通・自転車による15分生活圏を実現する。⑤地域性の継承・難波の宮の南の玄関口として、国内外から大阪でチャレンジする「街の登竜門」としての居住・店舗を共に創る。

持続可能な「上質な普通の暮らし」

オーナーは、寺田町界隈に複数の不動産を所有されており、現在、次世代に継承する不動産運用とエリアブランド創造に向けて、「1」から



エレベーターホールの夜景 (撮影: 笹倉洋平)



寺田町街角（ミニ）マルシェ

「2」「3」へと順次、事業を展開し、地域エリア全体に今回の基本方針が様々な形で波及していくよう願っています。

（関連記事）「レターズ223号」「大阪都心の上質な下町における「実験店舗」から見えてくる新しいコミュニティ」、レターズ229号「持続可能な地域づくりに貢献する賃貸住宅プロジェクトを進めています」レターズ232号「おおさか都市木循環プロジェクトを組成、大阪のまちに「顔の見える地域木材」を」※本プロジェクトは、アルパックの建築プランニングデザイングループ（山崎、塗師木）、サステイナビリティマネジメントグループ（畑中、中川、豊福、駒）と、JEN空間工房、（株）グリーンチーム、（一社）大阪府木材連合会、（株）南河内林業、（有）田中製材所、場とコトLAB、sumikov、（株）大室組、まこと建設（株）等との連携・協力により実践しました。

新人紹介

フットワーク軽く

横須賀生まれの神戸育ちです。大学までは明石海峡大橋を眺めながらのんびりと暮らし、大学院では京都（研究室）で過ごしました。今はまた神戸で暮らしています。

大学では土木を専攻し、ある講義をきっかけに景觀に興味を持ち、景觀を学びに大学院へ進学しました。大学院では様々な地域に実践プロジェクトを通して関わり、また、損保乃糸で有名な素麺業に関わる景觀というマニアックな研究にも取り組みました。こうした学生生活を経て、現場に足を運び、その土地の肌感覚を身につけることの大切さ、面白さを学びました。仕事をする上ではフットワーク軽く、現場の生の情報に触れることを大切にしたいです。これから自分が目指すコンサルタント像、人間像についてはまだ模索中ですが、目の前のことを丁寧にこなしながら考えていければと思います。どうぞよろしく願っています。



都市・地域プランニンググループ：竹中健起

「末長くコツコツと」

私は大阪生まれで、その後に滋賀、神奈川へと転居し、小学生の時に大阪に戻ってきて現在に至ります。大学時代は住居系の学部にいましたが、大学に隣接する「浅香地区」という旧同和地区にもぐり込んで、まちづくりの活動に関わってきました。修士研究では浅香地区を対象として旧同和地区のまちづくりの歴史を調査していたので、地域に入って実践と研究を繰り返しながら日々過ごしてきました。そして次第に将来も地域に入って仕事ができたら良いなと思い、アルバックに入社した次第です。

「地域の思いと私の思い」

三重県桑名市出身で、大学時代を東京で過ごし、就職を機に大阪へ引っ越してきました。大学では都市工学・都市デザインを学び、福島県浜通りを対象に、原発被災後のまちなかで建物が解体された後の土地がどのように変容し、手入れされているのかについて研究しました。

こうした手入りをされている方々の話を聞くと、地域に対する思いと自分が実現したいことを重ねながら手入れの活動をしているというのを感じました。都市・地域の問題を解決しようと

話は変わりますが、私が4歳の時に金魚すくいですくった金魚が、現在まで生きており今年で20年目を迎えました。（もしかするとギネス記録ではないかと勝手に思っている）全長は20センチぐらいなので、とても金魚には見えないですが、私もこの金魚のように末長く頑張りたいと思います！



地域産業イノベーショングループ：山口泰生

「一歩一歩」

福岡県久留米市の中でも自然豊かな町で自由奔放に育ち、これまで、建築学や土木工学から都市や地域計画について学びを広げてきました。進学を機に九州の中で南下し続け、最終的には大学院にて熊本に辿り着き、この春からは大好きな九州を離れ大阪での生活をはじめました。



生活デザイングループ：内野紬香

「人と向き合うこと」

岐阜市で生まれ、隣の本巣市で小学校と高専時代を過ごしました。小学校時代に通っていた柔道教室が高専で行われていたことと、幼いころから工作が好きだったことから、岐阜高専建築学科へ入学しました。高専の卒業研究で旧宿場町のまちづくりに関わったことをきっかけに、編入先の立命館大学では、都市計画研究室に3年間所属しました。地域に関わる分野でたくさんの人に出会い、刺激を受けてきました。そんな私の判断基準は「おもしろそう」でした。まちづくりをする中で、おもしろそうと思っ

た人には初対面でもついていき、朝まで語り合うということもありました。アルバックでの仕事は社会に「おもしろそう」をインストールする仕事だと思っています。「おもしろそう」の感覚を大切にしながら、人と人として向き合い、お互いが本音で語り合える仕事をしていきたいと思っています。



地域再生デザイングループ：辻寛太

近況 & イベントのお知らせ

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

43 回

2022 年
2 月 22 日

「食品ロスの削減から、生活の質や社会のあり方を変える」

講師 京都府立大学大学院教授 山川肇氏

第 43 回では、山川肇氏をお招きし、「もったいない」の掛け声だけではなかなか減らすことができない食品ロスの実態と社会全体で「食品ロスをそもそも発生させない」ためにはどうしていけばよいのかという観点からお話いただきました。山川さんは「画一的で過度なリスク管理が食品ロスを生んでいる側面」があると述べられ、家庭を含めた社会全体での食品流通の最適化をどのように進めるか、山川さん自身が取り組まれた事例も織り交ぜながら、海外や国内で行われている様々な事例について紹介いただきました。

社会全体で少しの手間を許容する、習慣を変更するといった取組で食品ロスが削減できる側面、取組をデジタル技術を活用するなどして支援する可能性、また家庭での食材管理を通じた生活の質の向上や、ビジネス面でも顧客や働く人々の満足度をあげる可能性など、幅広くお話頂くことができました。(齋藤友宣)

44 回

2022 年
3 月 18 日

「社会を希望で満たす働きかた～ソーシャルデザインという仕事～」

講師 ソーシャルデザイナー・社会福祉法人「素王会」理事長・「アトリエ インカーブ」クリエイティブディレクター 今中博之氏

第 44 回の適塾路地奥サロンは、ソーシャルデザイナーの今中博之氏をお招きしました。講演は「社会的課題を解決するための意図的な企て」としての「ソーシャルデザイン」が持つ力を、ご自身がデザインを志すまでのエピソードや知的障がいを持つアーティストが所属するアトリエ インカーブの紹介を交えながら教えていただきました。また、組織論やリーダー論についても語っていただきました。近年は、共感だけではなく共苦（＝共に苦しむ）の必要性を認識するようになったとのことで、それは今中氏が考えるリーダー像に結びついています。ご自身の新著『なぜ「弱い」チームがうまくいくのか』とも絡めつつ、共苦の覚悟を持ったリーダーが、次代の社会イノベーションを実現していくという展望を語っていただきました。

今中氏の「150 人くらいの市民自立型社会が身の丈に合う」という考えは、アルパックの所員数にも通じる点があり、リーダー論・組織論について考えを深めることができ、大変勉強になりました。(石川俊博)

東京

「まちのタイポグラフィ」

東京事務所 宮英理子

先日、新宿駅東口の交差点を歩いていた時に、ある看板が目に入りました。この少し変わった書体の案内表示、JR 駅構内で見かけたことのある方も多いのではないでしょうか。ご存知の方も多いと思いますが、この書体は修悦体といって、新宿駅で警備員をされている佐藤修悦さんという方が、ガムテープを使って生み出したものなのです。

修悦さんが新宿駅の警備を始めた 2002 年当時、新宿は工事中で、メガホンだけで多くの



人々を誘導していたそうです。そのことが、目立つ案内表示を作るきっかけになったとのこと。確かに独特な書体と色彩は視認性が高く、ガムテープのクラフト感も、日常の景観に何か引っかけものを生み出していると感じます。

現在も、修悦さんが現役なのかは定かではありませんが、見たことのない作品を見つけると嬉しい気持ちになります。訪れた日は、GW 中。まち行く人たちは向かい側の 3D 巨大猫に夢中で、その光景もなんだか対照的で興味深かったです。

滋賀

「ふしめの年に」

滋賀営業所 小川直史

滋賀営業所が位置する東近江市では、この 4 月から「第 2 次東近江市総合計画後期基本計画」と「第 2 期東近江市中心市街地活性化基本計画」がスタートしました。約 2 年かけて策定のお手伝いをしてきました。前計画の取組の成果はどうだったか、新たに見えてきた課題は何か、ここからどういうまちを目指していくか。様々な調査や検討を通して策定しました。

2016 年から支援している「木地師のふるさと発信事業」では、ここ 2 年間コロナ禍のために中止となっていた木地師文化フォーラムを 3 年ぶりに実施します。また、東京でのシンポジウム開催を計画しています。木地師に関する全国での調査研究や文化財登録を目指して進めている木地師に関する資料整理、2018 年度の滋賀県初の林業遺産認定などを経て、「木地師のふるさと東近江」を全国へ大きく発信する年になるよう取り組んでいます。

良い節目の年となるよう、引き続き汗をかいていきます。



事務所だより



写真上：縄手通りでの伝統工芸ワークショップ
下：四柱神社神楽殿で披露された津軽三味線

松本城を訪れた後は、城下町を散策しました。松本城周辺には、本町通り、大名町通り、伊勢町通り、女鳥羽川などのまちなみが残っていますが、城下町の雰囲気の色濃く残る

水野巧基：
公共マネジメントグループ



市民に守られてきた

松本城と城下町

現存する五重六階の天守の中で日本最古の国宝である松本城に行ってきました。

現存天守が残るのは全国で12の城のみであり、数が少ない理由としては、徳川幕府の「二国一城令」と「武家諸法度」及び明治政府による「廃城令」によるものです。松本城でも明治時代に、競売にかけられる等の危機がありました。博覧会の開催や住民の寄付によって天守が守られてきました。また、近年では「松本城およびその周辺整備計画」及び「松本市歴史的風致維持向上計画」によって、文化財以外にも道路の美装化や建物のファサード修景、井戸の整備等を複合的に実施し、歴史的まちなみ景観の向上を図っています。

これまで、多くの城や城下町を訪

れましたが、松本市の取組は目新しいものが多くありました。近年、熊本城等をはじめ、お城にゆかりのある武将に扮装した人達が観光客におもてなしをする取組は全国各地で見られますが、松本城では6家(石川氏・小笠原氏・戸田氏・松平氏・堀田氏・水野氏)が城主をつとめてきたこともあり、6家の城主に扮装した人達がおもてなしをしてくれま

また、近年の御朱印ブームによって全国各地の城でも「御城印」が販売されていますが、この御城印は30年以上前に松本城で販売されたのが初めてでした。松本城では、歴代城主2家の家紋の朱印符が販売されています。そのほか、城内はもちろ

ろんですが城外でも歴代城主6家の家紋がデザインされた装飾物が多く見られました。ここまで、歴代城主にスポットを当てているのは珍しく、市民の松本城への愛着を感じることができました。

松本城を訪れた後は、城下町を散策しました。松本城周辺には、本町通り、大名町通り、伊勢町通り、女鳥羽川などのまちなみが残っていますが、城下町の雰囲気の色濃く残る



松本城内と城外の歴代城主の家紋の装飾物

中町通りと縄手通りに行ってきました。桜も散りはじめた4月中旬に訪れましたが、伝統的なまちなみにはおしゃれなカフェやお店が揃っており、多くの若者や観光客で賑わっていました。また、縄手通りと隣接する四柱神社では、地元住民によって運営される「松本ジャポニスム」が開催されていました。四柱神社の神楽殿では、大人や子どもと一緒に伝統芸能を披露しており、縄手通りでは、伝統工芸の作家がワークショップを行い、観光客が伝統工芸を体験する機会を提供していました。神社で催し物が行われ、伝統文化や伝統芸能をその場で体感できるというのはとても魅力的で、楽しい時間を過ごすことができました。

松本市には初めて訪れましたが、私の先祖が松本城主であったこともあり、先人に思いを馳せながら、ま

ちの魅力を堪能しました。これからもちに足を運び、その地の歴史や成り立ちを大切にしながら、歴史ま

ちづくりに関わるお手伝いをしたいと思いま

表紙写真：今年の新入所員（撮影 山口泰生）

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所

〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-14 TEL(0748)36-2065 FAX(0748)36-2168

ホーチミン (ベトナム) No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。